

早稲田大学大学院日本語教育研究科

博士学位申請論文概要

論文題目

日本語の音声の習得と教育における母語の役割
—学習者の母語と母方言を活用した
音声教育を目指して—

申請者

劉 羅麟

2023年02月

本研究は、第二言語としての日本語の音声の習得と教育における母語の役割の一端を解明したうえで、学習者の母語と母方言を活用した日本語音声教育という教育理念およびその具体的な教育方法の確立を目指した研究である。

第一章 序論

第一章では、1.1 で本研究の背景を述べた。まず習得の視点から、第二言語習得において、学習者の母語が常に目標言語の習得を阻害するのではなく促進する場合もあり、多面的かつ重要な役割を持っている。音声習得においても、母語の役割が多くの仮説やモデルで議論され、母語と母方言の影響が解明されている。次に教育の視点から、第二言語教育において、母語の使用に対する消極的な考え方が批判され、母語の活用に関する実践と研究が行われその効果が検証されている。音声教育においても、母語の活用に関する提案が見られるが、個々の提案を包括する枠組みがなく、実際の効果の検証も見当たらない。最後に複言語主義の考え方を踏まえたうえで母語に着目する理由を述べ、日本語教育における音声教育の必要性を踏まえたうえで音声に着目する理由を述べた。1.1 の背景を受け、1.2 では本論文の研究目的を示し、それを達成するための問いを以下のように設定した。

- 問いⅠ：音声習得において学習者の母語は知覚と生成にどのような影響を及ぼすか。
- 問いⅡ：音声教育において学習者の母語はどのように活用できるか。

最後に、1.3 で用語の定義と記号の説明を行い、1.4 で本論文の構成（図 1）を示した。

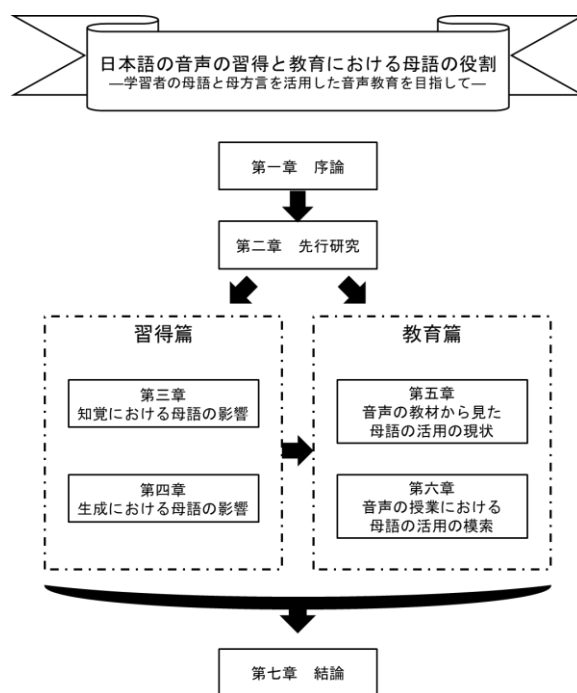


図 1 本論文のフローチャート

第二章 先行研究

第二章ではまず習得の視点から、2.1 で第二言語習得研究における母語に関わる用語の変遷を辿り、「干渉」はネガティブなイメージを持ちやすく、「転移」には定義と適切さの問題があることを述べた。そのため、本論文では「母語の役割」という表現を選択し定義した。2.2 では音声習得に焦点を当て、「有標性差異仮説」「音声学習モデル」「改訂版音声学習モデル」「類似性差異速度仮説」（Eckman 1977、Flege 1995、Flege & Bohn 2021、Major & Kim 1996）

などの仮説やモデルにおける母語の役割を確認した。また、音声習得における母語と母方言の負の影響と正の影響に関する議論を概観した。次に教育の視点から、2.3では第二言語教育における母語の活用の是非や効果に関する議論を概観した。また、母語の活用例を整理した先行研究（Harbord 1992、Cook 2001、Forman 2010、Littlewood & Yu 2011）を踏まえ、本論文における母語の活用の枠組み（図2）を構築した。2.4では音声教育に焦点を当て、母語の活用に関する提案を整理した。そのうえで、母語を活用した音声教育に関する着想が散在し、体系的な教育理念・教育方法として確立できていない現状にあると問題提起した。2.5ではナ行音・ラ行音の混同に関わる先行研究（日本語研究、中国語研究、習得研究）を概観したうえで、研究課題を四つ抽出し、習得篇



（第三章と第四章）に繋げた。 **図2 第二言語教育における母語の活用の枠組み**

- 問い I：音声習得において学習者の母語は知覚と生成にどのような影響を及ぼすか。

この問いを解明するために、下記の第三章と第四章ではナ行音・ラ行音の知覚と生成を研究事例とし、調査結果から母語の影響を明らかにした。

【習得篇】第三章 ナ行音・ラ行音の知覚における母語の影響

【習得篇】第四章 ナ行音・ラ行音の生成における母語の影響

第三章と第四章では、中国語西南官話話者の日本語学習者（SW）を対象に、無意味語を用いた聴取テストと発音テストを実施した。統計検定の手法を用いテスト結果を、子音、母音、直音・拗音、音環境という四つの観点で分析し、学習者の知覚と生成の特徴を明らかにした。これらの特徴を踏まえ、母語の影響の有無とその具体的な現れ方を以下のように考察した。

- ① 母語の影響が知覚と生成における学習者個人の特徴という形で現れる場合がある。SWの母方言である西南官話では/n/・/l/が同じ音素の自由異音であり、[n]と[l]のどちらで発音されるかには一定の規則がない。そのため、SWは日本語のナ行音・ラ行音を混同するが、混同の方向（どちらをどちらに間違えやすいか）が個人によって異なる。また、同じ学習者の知覚と生成を比較しても、一定の方向が見られない場合が殆どである。
- ② 母語の影響の現れ方が下位方言（タイプⅠ・Ⅱ）によって異なる場合がある。タイプⅡの方言では母音に関係なく/n/・/l/の音韻対立がないため、グループⅡのSWは母音に関係な

くナ行音・ラ行音を混同する（母語の負の影響）。タイプ I の方言では /n/・/l/ の音韻対立が洪音（例：/a/）の場合にないが細音（例：/i/）の場合にあるため、グループ I の SW は「ナ・ラ」などを混同するが「ニ・リ」を混同しにくい（母語の負の影響と正の影響）。

- ③ 母語の影響が音声のレベルよりも音韻のレベルで起こっている可能性がある。グループ I の SW は母方言の /ni/・/li/ と近似する「ニ・リ」の混同が起こりにくいため、「ニ・リ」と子音が同じである「ニャ ニュ ニョ・リャ リュ リョ」も同様に混同が起こりにくいと予想した。しかし、予想したこの特徴はごく一部の SW にしか見られなかった。これは、目標言語の子音と音声的に近似する子音が学習者の母語に存在する場合でも、その子音が別の母音と組み合わせたり、学習者の母語の音韻体系に存在しない音になる場合、母語の影響が現れにくいからだと推測できる。ただし、前述したように、一部の SW の知覚と生成には予想した特徴が見られたため、母語の正の影響が音声のレベルでも起こりうる。
- ④ 母語の影響以外に音環境の音声的な性質が影響している場合がある。ナ行音・ラ行音の混同が起こること自体は母語による負の影響だが、撥音の音環境において混同がさらに起こりやすくなるのは撥音の音声的な性質による影響だと思われる。つまり、ナ行音・ラ行音の前後に撥音が伴う音環境では、鼻音である撥音の影響により鼻音（ナ行音）と非鼻音（ラ行音）が弁別しづらくなる。

ナ行音・ラ行音の知覚と生成という事例から明らかになった上記の四点を理論化し、問い I 「音声習得における母語の役割」の答えを述べた（第七章で後述）。

- 問い II：音声教育において学習者の母語はどのように活用できるか。

この問いを解明するために、下記の第五章と第六章では教材調査から母語の活用の現状を把握したうえで、教育実践を通して母語の活用の方法を模索し、その効果と課題を述べた。

【教育篇】第五章 音声の教材から見た母語の活用の現状

第五章では、市販の教材におけるナ行音・ラ行音に関する記述を調査した。分析の結果、これらの記述は《理論》と《実践》に大別された。《理論》には〈混同の現象〉〈音声学上の名称・記号〉〈ラ行音の異音〉〈日本語と他言語の子音の異同〉の 4 分類があり、《実践》には〈生成〉〈知覚〉〈練習材料〉の 3 分類があった。各分類の記述を考察した結果、〈混同の現象〉〈日本語と他言語の子音の異同〉〈生成〉の三つにおいて学習者の母語を活用した記述が見られた。

〈混同の現象〉では、①母語と日本語との相違点から音声上の問題が起こる原因について説

明する記述が見られた。〈日本語と他言語の子音の異同〉では、②母語と日本語との類似点から発音方法について説明する、③母語と日本語との相違点から発音方法について説明する、④母語と日本語との相違点から発音する際の注意すべき点について説明する記述が見られた。

〈生成〉では、⑤母語と日本語との類似点から母語にある近似音で日本語の音声を代用する、⑥母語と日本語との類似点から母語にある近似音を日本語の音声の指導や練習に応用する記述が見られた。これらの記述の理論的背景としては、Lado (1957) をはじめとする対照言語研究の考え方、Cummins (1981) の「言語相互依存仮説」、Schmidt (1990) の「気づき仮説」、Flege (1995) の「音声学習モデル」などが挙げられる。

教材調査から把握した上記の六つの母語の活用方法について、本論文では特に「類似点」「相違点」という二つのキーワードと、「発音方法の説明」「発音する際の注意すべき点の説明」「音声上の問題が起こる原因の説明」「母語にある近似音での代用」「母語にある近似音の指導や練習への応用」という五つのキーワードに着目した。前者から「類似点の活用か相違点の活用か」という観点を抽出し、後者から「理論寄りの活用か実践寄りの活用か」という観点を抽出した。この二つの観点に基づき、次章で述べる母語の活用方法の枠組みを構築した。

【教育篇】第六章 音声の授業における母語の活用の模索

第六章では、学習者の母語と母方言を活用した音声教育を実践した。まず、前章で抽出した二つの観点に基づき、音声教育における母語の活用方法を考案する際の参照枠として、「言語間類似点・相違点に基づく理論的・実践的母語の活用方法の枠組み (TP-SD)」を構築した(図3)。この枠組みに基づき、本論文では以下の六つの活用方法を提案した。

- ① 【問題原因の説明】: 母語と日本語の比較からその相違点を用い、発音や聴取において問題が起こる原因について説明する。
- ② 【注意点の説明】: 母語と日本語の比較からその相違点を用い、発音や聴取において注意すべき点について説明する。
- ③ 【発音方法の説明】: 母語と日本語の比較からその類似点を用い、日本語の発音の仕方について説明する。

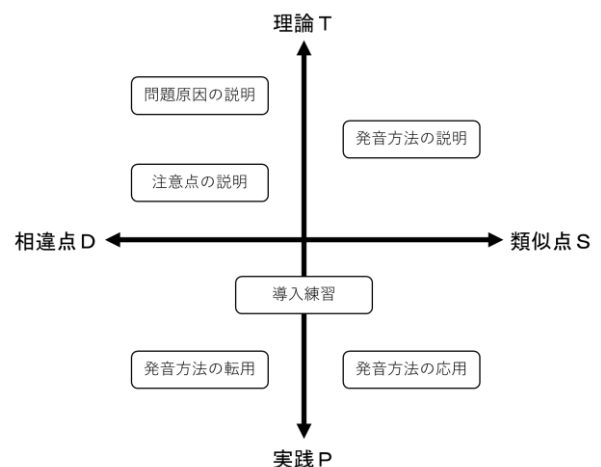


図3 音声教育における母語の活用方法の枠組み

- ④ 【導入練習】: 母語と日本語の相違点または類似点を踏まえ、日本語の発音の練習を始

める前に母語の語や文を導入として練習し、発音の仕方を意識し把握する。

⑤ 【発音方法の応用】： 母語と日本語の類似点を踏まえ、母語の発音の仕方を日本語の発音の練習に応用する。

⑥ 【発音方法の転用】： 母語と日本語の相違点を踏まえ、母語の発音の仕方を取えて日本語のように変更し、さらにそれを日本語の発音の練習に転用する。

本章では上記の六つの活用方法に基づき、日本語の清音・濁音、ナ行音・ラ行音、拍とリズム、アクセントとその規則、イントネーションに関する具体的な説明方法や練習方法を考案した。これらを用い、中国語西南官話話者の日本語学習者を対象に、学習者の母語と母方言を活用した音声教育実践を行った。アンケートとインタビュー調査を通し、「受講者の学び」と「母語の活用に対する捉え方」を明らかにした（図4、図5）。

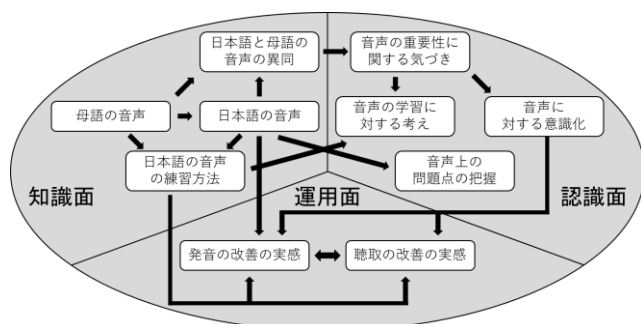


図4 受講者の学びの概念図

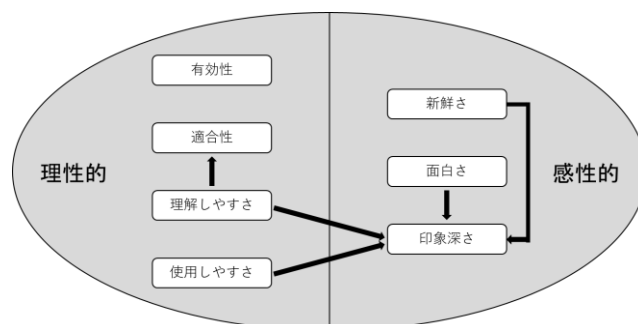


図5 母語の活用に対する捉え方の概念図

「受講者の学び」と「母語の活用に対する捉え方」の分析結果を踏まえ、音声教育における母語の活用の効果と課題について以下のように考察した。

1) 母語の活用の効果：

- ① 日本語の音声に対する学習意欲を喚起するという効果がある。学習意欲が喚起されるきっかけとしては、母語と日本語（特にその音声上の相違点）を比較することで音声の重要性に学習者が気づいたことと、馴染みのある母語を活用することで日本語の学習を学習者が面白いと感じたことが挙げられる。
- ② 日本語の音声に対する理解を促進するという効果がある。特に外国語の学習経験の少ない学習者にとって有用である。さらに、日本語の音声を母語の音声と関連付けることにより、理解して得た知識が印象に残りやすく長期的に保持できる可能性が窺える。
- ③ 日本語の音声の練習における困難を軽減するという効果がある。実践のしやすい練習方法で練習が開始しやすくなるだけでなく、音声に対する明確な判断基準で練習する際の不確かさや戸惑いも軽減される。
- ④ 日本語の音声に対する自信を向上させるという効果がある。母語を活用した練習方法

で自身の発音や発音練習をすることに対する学習者の不安が軽減され、練習後に発音や聴取が改善されたという実感が得られる。

- ⑤ 日本語の学習を促進するという本来の目的以外に、母語の音声に関するメタ言語知識の獲得に繋がり、母語に対する知的好奇心を満たすという効果もある。また、日本語と母語の両方を融合させた学習は、その片方の学習よりもこの効果を増幅できる。

2) 母語の活用の課題：

- ① 母語の活用に対する学習者の捉え方の把握：母語や母方言の使用頻度の低い学習者がその有効性に疑問を感じる場合や、内向的な性格の学習者が特定の練習方法を恥ずかしく感じ、使用しなくなる場合がある。そのため、特に複数名の学習者を対象とした音声の授業では、母語の活用に対する学習者の捉え方を把握する必要がある。
- ② 母語を活用する目的の共有と確認：日本語の音声の授業でなぜ母語から説明を始めるかに学習者が戸惑う場合や、母語と日本語の相違点を活用した説明を類似点の説明だと学習者が誤解する場合がある。そのため、授業前のオリエンテーションや授業中の説明などの際に、母語を活用する目的を学習者に共有し、その目的に対する共通認識が得られていることを確認する必要がある。
- ③ 教師と教材によるサポート：学習者が母語の発音方法をすぐに応用できないと感じる場合や、自身だけで母語の活用方法を探るのが困難だと感じる場合がある。そのため、教師による個別指導などのサポートが必要である。ただし、独学などの場合、教師によるサポートが得られにくいことがある。また、異なる母語を持つ複数の学習者がいる場合、教師が全ての学習者の母語に対応できないこともある。そのため、母語を活用した説明方法や練習方法などを、教材として学習者や教師に提供する必要がある。
- ④ 学習意欲の維持と練習方法の定着：母語の活用という新しい学習方法に対する新鮮感が、この方法の面白さに対する学習者の肯定的な捉え方に繋がり、さらに学習意欲の向上に繋がる場合がある。また、前述した新鮮感が、母語を活用した練習方法の有効性などに対する学習者の捉え方に影響している可能性もある。そのため、母語の活用に対する新鮮感が減退した後に、日本語の音声について学習する意欲を維持し、母語を活用した練習方法の定着を図る必要がある。

第七章 結論

第七章では、問いⅠ・Ⅱに対する答えをまとめ、最終的な研究目的を達成した。

まず、第三章と第四章を踏まえ、問い I に対する答えを以下のように述べた。

● **問い I : 音声習得において学習者の母語は知覚と生成にどのような影響を及ぼすか。**

1) 母語の影響と母方言・下位方言の影響 :

学習者の母語において音素 X と Y (例 : /n/・/l/) の音韻対立がある場合は、それと近似する第二言語の音素 X' と Y' (例 : /n/・/r/) の弁別が困難でない。しかし、他の方言と異なり学習者の母方言に X と Y の音韻対立がない場合は、第二言語の X' と Y' の混同が起こる。さらに、母方言を下位方言まで細分化した際、X と Y の音韻対立の有無と分布において異なる特徴が見られる場合は、第二言語の X' と Y' の混同にも異なる特徴が見られる。

2) 母語による負の影響と正の影響 :

学習者の母語において音素 X と Y (例 : /n/・/l/) の音韻対立がない場合、母語の負の影響で、第二言語の音素 X' と Y' (例 : /n/・/r/) の知覚や生成において混同が起こる。ただし、母語の X と Y が一定の条件 (例 : 後続母音の種類) において X₂ と Y₂ (例 : /ni/・/li/) のような一部の区別が存在する場合、母語の正の影響で、第二言語の X'₂ と Y'₂ (例 : /ni/・/ri/) は X'_{1, 3, 4, 5} と Y'_{1, 3, 4, 5} (例 : /na, u, e, o/・/ra, u, e, o/) と比べ混同が起こりにくい。

3) 学習者個人の知覚や生成上の特徴として現れる母語の影響 :

学習者の母語において音素 X と Y (例 : /n/・/l/) の音韻対立がない場合、母語の負の影響で、第二言語の音素 X' と Y' (例 : /n/・/r/) の知覚や生成において混同が起こる。母語の X と Y がどちらの音で発音されるか一定の規則がない場合、第二言語の X' と Y' の混同にも一定の方向がない。その結果、同一母語の学習者でも個人によって異なる特徴を呈する。

4) 音韻のレベルと音声のレベルにおける母語の影響 :

第二言語の子音と母音の組み合わせ X'₁ と Y'₁ (例 : [ni]・[ri]) の近似音が、学習者の母語の音韻体系に X₁ と Y₁ (例 : [ni]・[li]) として存在する場合、母語の正の影響が現れやすい。一方で、この子音が別の母音と組み合わせたり X'₂ と Y'₂ (例 : [na]・[ra]) になり、その近似音が学習者の母語の音韻体系に存在しない場合、母語の正の影響が現れにくい。つまり、母語の影響が音声のレベルよりも音韻のレベルで起こっている可能性がある。

5) 母語の影響と音環境の影響の相乗効果 :

学習者の母語において音素 X と Y (例 : /n/・/l/) の音韻対立がない場合、母語の負の影響で、第二言語の音素 X' と Y' (例 : /n/・/r/) の知覚や生成において混同が起こる。さらに、X' と Y' が特定の音環境にある場合 (例 : 前後に撥音/N/が伴う)、母語の影響と音環境の影響の相乗効果で混同がさらに起こりやすくなる。

次に、第二章および第五章と第六章を踏まえ、問いⅡに対する答えを以下のように述べた。

● 問いⅡ：音声教育において学習者の母語はどのように活用できるか。

1) 第二言語教育における母語の活用の枠組みの構築：

本論文で着目する母語の活用の意味を明確にするために、先行研究から抽出した【目的】【計画性】【使用者】という三つの観点に、【活用手段】【言語領域】【言語運用】の三つを追加し、第二言語教育における母語の活用の枠組みを構築した（本概要書 3 頁、図 2）。

2) 音声教育における母語の活用方法の枠組みの構築：

先行研究の整理を通し、学習者の母語を活用した音声教育に関する着想が散在しており、体系的な教育理念・教育方法として確立できていない現状にあると問題提起を行った。この問題を解決するために、先行研究と教材に見られる母語の活用方法を整理し、音声教育における母語の活用方法の枠組みを構築した（本概要書 5 頁、図 3）。

3) 具体的な活用方法の考案およびこれらの方法を用いた教育実践の実施：

上記の枠組みを参照し、日本語の清音・濁音、ナ行音・ラ行音、拍とリズム、アクセントとその規則、イントネーションに関する具体的な説明方法や練習方法を考案し、教育実践を行った。アンケートとインタビューの調査結果を分析し、受講者の学びと母語の活用に対する捉え方を明らかにした（本概要書 6 頁、図 4・図 5）。

4) 教育実践の結果から見る母語の活用の効果と課題：

上記の分析結果を踏まえ、母語の活用の効果として、①日本語の音声に対する学習意欲の喚起、②日本語の音声に対する理解の促進、③日本語の音声の練習における困難の軽減、④日本語の音声に対する自信の向上、⑤母語に関する知識の獲得と知的好奇心の満足、という五点を述べた。母語の活用の課題として、①母語の活用に対する学習者の捉え方の把握、②母語を活用する目的の共有と確認、③教師と教材によるサポート、④新鮮感が減退した後の学習意欲の維持と練習方法の定着、という四点を述べた（詳細は第六章）。

● 最終的な研究目的：学習者の母語と母方言を活用した日本語音声教育への提言

1) 母語と母方言をなぜ活用するのか：

第二言語習得研究では母語が目標言語の習得を阻害するだけでなく、促進する場合もあると認識されるようになった。第二言語教育研究でも母語の使用に対して消極的だったが、次第に母語を積極的に教育に活用する方法が探究され、実際の効果も検証されてきた。本論文で行った教育実践の結果からも、母語の活用には課題があるものの、その効果が示唆された。重要なのは、母語を活用するか否かではなく、どのように活用するかである。

2) 母語と母方言をどのように活用するのか :

活用方法について提言する前に、第二章の枠組みに基づき本論文で着目する音声教育における母語の活用の意味を再確認した(図6)。その具体的な活用方法を考える際の参照枠として「TP-SD」という枠組みを構築した(図3)。この枠組みでは、次の二つの観点で思考を明確にしたうえで、母語の具体的な活用方法を考案することを提案する。①学習者の母語と日本語の類似点(Similarity)を活用するか、相違点(Dissimilarity)を活用するか、②それらを理論寄りの形(Theoretical)で活用するか、実践寄りの形(Practical)で活用するか。本論文ではこの枠組みに基づき、【問題原因の説明】【注意点の説明】【発音方法の説明】【導入練習】【発音方法の応用】【発音方法の転用】という六つの活用方法を提案した。これら以外にも様々な活用方法が考えられ、前述した枠組み「TP-SD」と共に、音声教育における母語の活用方法を考案する際の参照枠として提言した。

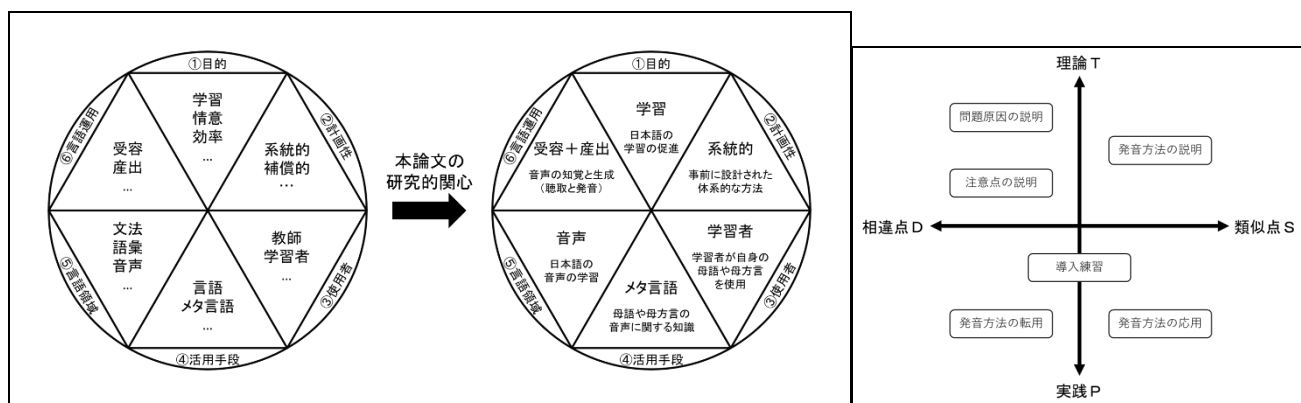


図6 本論文で着目する母語の活用

図3 (再掲) 母語の活用方法の枠組み

3) 母語と母方言をどのような場合に活用するのか :

母語をより有効に活用するには、どのような場合において母語の活用が役に立つかを把握する必要があると思われる。本論文の成果を踏まえ、次の五つの場合における母語の活用を提言した。①音声の重要性に対する認識の不足や音声の学習に対する興味の欠如などの理由で学習者の学習意欲が欠如している場合、②学習者がこれまで受けた説明方法で十分に理解できない場合、③学習者がこれまで用いた練習方法で困難を感じる場合、④日本語の音声およびその学習に対して学習者が自信を持ってない場合、⑤日本語だけでなく母語に対する学習者の理解を促すという教育的な目的がある場合、の五つである。

上記では問い I・II に対する答えを述べ、最終的な研究目的である学習者の母語と母方言を活用した日本語音声教育について提言した。最後に、今後に向けて以下の課題を提示した。

1) 音声習得およびその研究に関わる課題 :

- ① 母語の正の影響が音声のレベルで起こる条件の解明：第三章と第四章では一部の学習者のデータから、母語の正の影響が音韻のレベルだけでなく音声のレベルでも起こることが示唆された。これらの学習者の特性（音声をメタ的に捉えているかどうかなど）を明らかにし、その条件を解明できれば、教育への応用も期待できる。
- ② 混同の方向に影響を与える要因の解明：第三章と第四章では母方言の/n/・/l/が自由異音であることがナ行音・ラ行音の混同の方向に影響すると述べた。今後は同じ学習者に複数回の聴取・発音テストを行い、各回のテストで混同の方向が安定するかどうかを確認する。複数回の中に混同の方向が安定する場合は、母語以外の要因（個人の発音上の習慣など）による影響が考えられ、その要因を解明する必要がある。
- ③ ナ行音・ラ行音という研究事例から理論化した五つの結論の精緻化と一般化：精緻化とは例えば、母語の影響と音環境の影響の相乗効果を確認したが、母語と音環境以外の要因との相乗効果もしくは相殺効果を検証する必要がある。一般化とは例えば、学習者個人の知覚や生成上の特徴として現れる母語の影響を確認したが、ナ行音・ラ行音以外の音声項目（清音・濁音など）の習得にも適用されるか検証する必要がある。

2) 音声教育およびその研究に関わる課題：

- ① 母語の活用方法の枠組みの発展：本論文では「TP-SD」という枠組みを構築し、【問題原因の説明】【注意点の説明】【発音方法の説明】【導入練習】【発音方法の応用】【発音方法の転用】という六つの活用方法を提案した。今後は研究および実践を続け、例えば、母語を日本語の発音だけでなく聴取の練習のほうに活用する方法を開発するなど、前述の枠組みとそれに基づいた具体的な活用方法の発展を図っていきたい。
- ② 母語を活用した説明方法や練習方法の改善：第六章では母語の活用効果が確認された一方でいくつかの課題も浮き彫りになった。例えば、母語を活用した一部の説明方法では目的が十分に共有されなかった。また、母語を日本語のリズムに変えるという練習方法では両言語のリズムの相違に対する意識化を促すことを目的としたが、内向的な性格の学習者はこの方法を使用しない可能性があるという意見もあった。今後は実践と研究を続け、母語を活用した説明方法や練習方法を改善していきたい。
- ③ 学習者や教師を支援する方法の探究：第六章では学習者が自身だけで母語について考えその活用方法を探るのが困難であること、教師が学習者の母語の音韻体系に関する専門知識を有しない場合があることを述べた。このような状況に対応するには、本論文で考案した母語の活用方法を教材として提供するほか、教師に学習者の母語を活用

した音声教育に関する教師研修の機会を提供する必要がある。また、前述の音声教育を行う際に教師が直面する困難を把握し、教師を支援する方法を探究する必要もある。

【引用文献】

- Cook, V. (2001) Using the First Language in the Classroom. *The Canadian Modern Language Review*, 57(3), pp.402-423.
- Cummins, J. (1981) The Role of Primary Language Development in Promoting Educational Success for Language Minority Students. In California State Department of Education (ed.), *Schooling and Language Minority Students: A Theoretical Framework*, pp.3-49. Los Angeles: California State University.
- Eckman, F. (1977) Markedness and the Contrastive Analysis Hypothesis. *Language Learning*, 27(2), pp.315-330.
- Flege, J. (1995) Second-language Speech Learning: Theory, Findings, and Problems. In Strange (ed.), *Speech Perception and Linguistic Experience: Issues in Cross-language Research*, pp.229-273. Timonium, Maryland: York Press.
- Flege, J. & Bohn, O. (2021) The Revised Speech Learning Model (SLM-r). In Wayland (ed.), *Second Language Speech Learning: Theoretical and Empirical Progress*, pp.3-83. Cambridge: Cambridge University Press.
- Forman, R. (2010) Ten Principles of Bilingual Pedagogy in EFL. In Mahboob (ed.), *The NNEST Lens: Non Native English Speakers in TESOL*, pp.54-86. Newcastle upon Tyne: Cambridge Scholars Publisher.
- Harbord, J. (1992) The Use of the Mother Tongue in the Classroom. *English Language Teaching Journal*, 46(4), pp.350-355.
- Lado, R. (1957) *Linguistics across Cultures: Applied Linguistics for Language Teachers*. Ann Arbor: University of Michigan Press.
- Littlewood, W. & Yu, B. (2011) First Language and Target Language in the Foreign Language Classroom. *Language Teaching*, 44(1), pp.64-77.
- Major, R. & Kim, E. (1996) The Similarity Differential Rate Hypothesis. *Language Learning*, 46(3), pp.465-496. doi: 10.1111/j.1467-1770.1996.tb01244.x
- Schmidt, R. W. (1990) The Role of Consciousness in Second Language Learning. *Applied Linguistics*, 11(2), pp.129-158. doi: 10.1093/applin/11.2.129